

唐木順三全集

第六卷

筑摩書房版

唐木順三全集第六卷

昭和四十二年十一月二十五日初版第一刷發行
昭和五十六年十一月二十日増補版第一刷發行

著者 唐木順三

發行者 布川角左衛門

發所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(割)七六五一(營業)

東京(割)六七一一(編集)

振替 東京 六一四—一二三

印刷 株式會社精興社
製本 鈴木製本株式會社

Printed in Japan 0395—74506—4604

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係あてにご送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

千利休

一千 利休	三
一 さびとわび——世阿彌と利休——	三
二 堺商人の性格	七
三 信長と茶湯者	七
四 山崎の妙喜庵	三
五 大阪城と山里丸	三
六 書院と草庵	四
七 利休以後の茶	三

中世から近世へ

中世の宗教、文學、藝術

八 利休の切腹 二

九 日本の近代化世俗化の問題 一〇

一〇 わび、からさびへ——利休から芭蕉へ—— 一三

(一) 芭蕉のわび 一三

(二) わびからさびへ 一六

二 長谷川等伯と利休 一四

三 『南方錄』の問題 一五

四 初花經歷譚 一六

あとがき 一七

新版にあたって 一五

關係人物生歿年表

能の魅力——老枯の美——	101
わ び	111
西 行	117
徒然草くさぐさ	111
傳統藝術と現代	115
司馬江漢	113
梅宮覺書	114
江戸初期における裝飾過多の傾向について	113
桂、修學院兩離宮構想の背景	113
鎖 國	115
キリシタン問題	116
外國人のみた日本	116
一 火繩銃とクルス——貿易と布教	116
二 和魂洋才——その國民性への影響	116
三 目付制度——枠にはめられた國民性	117

四 條約の強制とそれのもたらしたもの	三六七
五 異國趣味	三九七
六 日本・世界的なるものへの開眼	四〇五
七 終りに	四二〇
あとがき	四三〇
親 鸞——歴史の意識と横超——	四三五
道元の道得と愛語	四四六
法燈國師のこと	四四九
等伯雜感	四五四
呼吸が合ふといふこと——能の形而上學——	四五六
茶道と現代人	四六四
『佛教文學集』のための解説	四六六
後記	四六七

千

利

休

一 千 利 休

一 さびとわび

— 世阿彌と利休 —

さびとわびは一般に同意語として、または近親語として使はれてゐる。然し、事實はかなり違ふ、或ひは相當なへだたりがある。わびには、さびとは異質的な要素が入つてゐる。少くとも千利休以來の侘茶、侘數寄のわびには、さびとは異なる心理と事實が入つてゐる。その相違を抽象的に語る前に、まづ世阿彌と足利義滿の關係を、利休と織田信長・豊臣秀吉の關係に比較してみたい。世阿彌と利休をここへ並べるのは、單に思ひつきではない。また日本の藝能史上の二つの巨峯を比較するといふ文化史的な興味につきるものではない。利休は金春流の太夫宮尾道三について諺を習つたことがあるばかりか、彼の後妻宗恩は道三の娘であつたといふ傳へもある。利休がこの道三の好意によつて金春禪竹の手に渡された世阿彌の傳書『風姿華傳』やまた『至花道』を見たといふ推定もでてくる。また天正年間にはそれらの傳書の寫本が出てゐたのである。利休の使つた「炭の花」といふ言葉や、

彼が己が運命を豫知して、切腹の一ヶ月餘り前に作つたといはれる「枯のこる老木の櫻枯折て今年ばかりの花の一房」の歌の中にも、世阿彌の花、残れる花の影響をみることが出来る。さらに利休の茶の師であつた武野紹鷗は、その前身は三條西實隆について學んだ連歌師であり、「枯かじけ寒かれ」といふ心敬法師の言葉に特別な注意を拂つてゐる。世阿彌が心敬に近かつたことは周知である。この近さの背後に禪のあることはいふまでもない。禪竹も珠光もともに一休禪師の弟子であつた。世阿彌も利休もその背景には禪がある。

世阿彌と利休は右のやうな點で相似ながら然も異つてゐる。世阿彌の最後に到達した境地のさびと、利休のわびとは相當に違つてゐるのである。

『花傳書』（『風姿華傳』）は世阿彌の四十歳頃に書かれたものといはれる。二十年前に死別した父親阿彌の庭訓を忠實に録したもので文中にも次のやうな言葉がある。「凡そ、花傳の中、年來の稽古より初めて、この條々を注す所、全く自力より出づる才學ならず。幼少より以來、亡父の力を得て、人となりしより廿餘年が間、目に觸れ、耳に聞き置きし儘、その風を受けて、道の爲、家の爲、これを作する所、私有らむものか。」

この父子相傳の『花傳』の序に、「好色、博奕、大酒、三重ノ戒、是レ、古人ノ掟也」「稽古は強かれ、情識は勿れ」の二項を特に注意してゐるが、これは、この父子のおかれた位置と覺悟を率直に示してゐるといつてよい。『花傳』第二の『物學條々』の冒頭に、物真似こそ此の道の肝要といひながら、そこに濃き薄きの別のあることを示してゐる。「先づ國王、大臣より始め奉りて、公家の御起居、武家の御進退は、及ぶべき所にあらざれば、十分ならん事難し。さりながら、よくよく言葉を尋ね、科を求めて、見所の御意見を待つべきをや。その外、上

職の品々、花鳥風月の事態ことわざ、いかにもいかにも細に似すべし。田夫野人の事にいたりては、さのみに細々賤しげなる態わざをば似すべからず。假令けりやう、木樵、草荊、炭焼、汐汲などの、風情にもなるべき態をば、細にも似すべきか。それより猶賤しからん下職をば、さのみに似すまじきなり。これ上方うへかたの御目に見ゆべからず。若し見えば、あまりに賤しくて、面白き所あるべからず。此宛行あてがひをよくよく心得べし。」

これは物真似の對象が、國王、大臣、公家、武家であること、またそれ以外の對象を選ぶ場合には、高貴な人の理解しまた面白しと思ふ限りにおいて似すべきであることを言つてゐる。能の先行藝能である田樂や猿樂がもともと田舎のものであり、それを演ずるものが下賤の身分に屬してゐたことは、多くの人の實證してゐるところである。この田舎廻りの旅藝人から、みづからを解放して、その藝を高貴な象徴藝術にまでたかめることが觀世父子の課題であつた。好色、博奕、大酒を禁じたのは、彼の支配する一座全體への宣告であつたらうし、稽古は強かれは、自らにも課した掟であつた。稽古の目標は一言にいへば「ただ言葉賤しからずして姿幽玄ならんを、うけたる達人とは申すべきか」の達人の境に入ることである。『年來稽古條々』は、七歳から始まる當藝の稽古の、その年齢年齢に應じての心得をしるしたものだが、十七八歳の頃の心得として、「此の頃の稽古には、指をさして人に笑はるるとも、それをば願ず、内にて、聲、喉突かんずる調子にて、宵曉の聲を使ひ、心中には願力を起して、一期の堺さかいこなりと、生涯に懸けて、能を捨てぬより外は、稽古あるべからず」と示されてゐる。中心に願力を起して、一期の堺さかいこなりと、といふ覺悟は、恐らく全生涯を貫くものであつたらう。觀世一座のきびしい訓練が察せられるのみか、農民の間に生きてゐた信仰の力、ストイックな嚴肅主義の程が察せられるのである。一説によれば、田樂、猿樂の徒は、時宗の阿彌教團に屬し、すべて阿彌號をもつてゐたといふ。この阿彌教團の

集團的情熱的な信仰と生活規律が、觀世父子において姿をかへて能の確立といふひたすらな情熱に凝集し、言葉賤しからずして姿幽玄ならんとする一徹な稽古に表現されたとみてよい。世阿彌の録した能樂理論には、實踐家のみがもちうる激しい氣魄が充ちあふれてゐる。ここには都會人の享樂氣分は微塵もない。高見の見物人のいふ批評もなければわけしりの高言もない。田舎出特有の生真面目な努力、ひたむきの稽古があるばかりである。觀世父子はこの道に没頭した。己れを捨ててこの一筋に生きた。『花傳書』の中の「私儀云」の一條、殊にその最後の一節は、この父子の道念の表白といつてよい。「此の壽福増長の嗜みと申せばとて、ひたすら世間の理に關りて、若し欲心に住せば、これ第一、道の廢るべき因縁なり。道の爲の嗜みには、壽福増長あるべし。壽福の爲の嗜みには、道正に廢るべし。道廢らば、壽福自ら減すべし。正直圓明にして、世上萬徳の妙花を開く因縁なりと、嗜むべし。」

應安七年（一三七四）今熊野で行はれた足利義滿御覽の神事猿樂は、觀世父子にとつてばかりではなく、今日の能にとつてもまことに劃期的なことであつた。それまでの將軍御覽の能藝は田樂ばかりであつたのに、ここで初めて猿樂が選ばれたこと、觀世父子がここで將軍家と結びつくことによつて、田舎の旅藝人から都會の能樂師になつたばかりでなく、これを契機にして能そのものの性格の革新が行はれたのである。四十二歳の觀世清次は、やがて世阿彌を名乗る十二歳の長子藤若丸に面箱をもたせて、『翁』を舞つた。蒔繪の面箱を目高に捧げて太夫に先行する役は、美貌の少年を使ふのが例である。十八歳の青年將軍義滿にこの面箱を持つ藤若の美しい姿が特別の注意を引いた。義滿藤若の關係は次第に緊密なものとなつていつたことは、周知の『後愚昧記』が誌してゐる。

る永和四年（一三七八）六月七日の祇園祭の記事によつて明らかである。二十一歳になつた青年將軍は十六歳の藤若丸をつれて、四條東洞院の棧敷で酒宴を催しながら、山車行列の渡るのを見た。日記の著者内大臣押小路公忠はかう書いてゐる。「大和猿樂兒童（稱觀世猿樂法師子也）被_レ召_二加大樹（義滿）棧敷見物也。件兒童自_二去頃、大樹寵_二愛之_一、同_レ席傳_レ器。如_レ此散樂者乞食所行也。而賞翫近仕之條、世以傾_二奇之_一。連連賜_二財產、與_二物於此兒_二之人、叶_二大樹之所存_一。仍大名等競而賞賜之、費及_二巨萬_一云々。比興事也。」

藤若を呼ぶに大和猿樂兒童を以てしてゐるのは、九條兼實の日記『玉葉』が、頼朝の伊豆での舉兵を聞いて「義朝之子謀叛」と書いてゐるのを聯想させる。觀阿彌を呼ぶに大和猿樂を以てしてゐるのは、大和に座をもつ田舎廻りの旅藝人、ぐらゐの侮蔑の意を含んでゐる。それでもなほをさまりかねて散樂（猿樂）を乞食の所行と呼んでゐるところからも、當時の堂上公卿が、いかなる態度で能樂師をみてゐたかは察しがつくのである。

かういふ貴人たちを觀客として舞臺に立つ大和猿樂の倅とその父はどういふ心構へをしてゐたか。さきに書いた「先づ國王、大臣より始め奉りて、公家の御起居、武家の御進退は、及ぶべき所にあらざれば、十分ならん事難し。さりながら、よくよく言葉を尋ね、科を求めて、見所の御意見等待つべきをや。」さらには、「女御、更衣などの似事_{（にせごと）}は、輒_{（たち）}くその御振舞ひを見る事なければ、よくよく伺ふべし。衣、袴の着様、すべて私ならず、尋ねべし。」さういふ田舎者のひたすらな物真似に彼等親子は情熱を傾けてゐたのである。

『花傳書』また『申樂談儀』などに、「貴人の御意に叶へる事」「貴人の機嫌を伺ふべき事」等の言葉がたびたび出てくる。義滿の同朋衆の一人として世阿彌は次のやうなことさへ書いてゐるのである。東の洞院の傾城に高橋殿といふ女がゐたが、この女性は殊の外に義滿の御氣に入りであつた。義滿がもう少し酒を飲みたいといふとき

には、言はれない前にそれと察して酒を強ひる。情性で飲んでゐるときにはそれを察して、扣へさせる、といった次第で、將軍の心をよくみぬき、氣轉が利いてソツがなく、ために御機嫌を損ずることなく生涯を終つた。さういふ點はまた世阿彌が高橋殿以上の名人であつたと人々に褒められたといふ。これを「人の中を莞爾となすべし。然れば色知りにてなくば、住する時節あるべし」といふ例として引いてゐるのである。室町時代の將軍に仕へた同朋衆は、またの名を重坊また佞坊といはれ、色々のたはけ事をし、たはごとを言ふ幫間的存在であつたといふ一説もあるやうに、貴人の御意に叶ふことを専らにするといふ點が世阿彌にもまぬがれがたかつたに相違ない。

觀世父子の大和猿樂が、まづ物眞似を取立てて、それを根本とし、基本の出來上つたところで幽玄の風躰を取入れようとしたのに對し、近江猿樂は、まづ幽玄の風躰を第一とし、物眞似を次としたことは、『花傳書』の奥儀に示されてゐることである。觀阿彌はこの大和猿樂の流儀をそのままに實行したやうにみえる。「物眞似の品、筆に盡し難し。さりながら、此の道の肝要なれば」の言葉を以て『物學條々』が始つてゐるのをみてもそれはわかることである。觀阿彌の子として、また弟子としての世阿彌の出發がここにあつたこともまたいふまでもない。然し二十二歳で父に死別した世阿彌は、父に依據しながらも次第々に自己獨特の境を展いていつた。それは、たとへばさきにも引いた、「女御、更衣などの似事は、輒くその御振舞ひを見る事なければ、よくよく伺ふべし」云々、「國王、大臣より始め奉りて、公卿の御起居、武家の御進退は、及ぶべき所にあらざれば、十分ならん事難し」云々の言葉と、彼の晩年の作といはれる『花鏡』の次の言葉とを比較してみれば、世阿彌の獨自の境は明瞭にならう。

「公家の起居たてまつりの、位高く、人貌世に變れる御有様、これ、幽玄なる位と申すべきやらん。然れば、ただ美しく、柔和なる躰てい、幽玄の本躰なり。人躰閑かなる粧にんていのどひ、人ない（躰）の幽玄なり。又、言葉優しくして、貴人、上人の御慣はしの言葉遣ひを、よくよく習ひ伺ひて、假初なりとも、口より出さんずる言葉の優しからん、これ言葉の幽玄なるべし。」

世阿彌は此の節の冒頭に、「當藝に於いて、幽玄の風躰第一とせり」といひ、また、「何の物真似に品を變へてなるとも、幽玄をば離るべからず」と書き、「やゝもすれば、その物その物の物真似許りを爲分しわたるを至極と心得て、姿を忘るる故に、左右無く幽玄の堺に入らず」といつてもゐるのである。『花修』で、「人に於いては女御、更衣、又は優女、好色、美男、草木には花の類、か様の數々は、その形、幽玄のものなり」といひ、かういふそれ自體幽玄な對象をよく真似れば、「自らも幽玄なるべし」といつてゐる。

それ自體、即自的に幽玄なものと、それを藝術的に物真似したところに生れる舞臺上の幽玄が、美的に同等であると幽玄自體の方から思はれる段階から、更に進んで、藝術上の幽玄こそ眞の幽玄と思はざるをえない境に達し、逆に舞臺姿の幽玄を物真似することによつて、眞の幽玄に近づかうといふ意識が、生の幽玄なまの側に出てくるとき、そのとき、能樂は、藝術として眞に獨立したといつてよい。

世阿彌は『申樂談儀』の中で、亡父は大男であつたが、女能を舞ふときは、その姿がほそぼそとなり、また、『自然居士』で黒髪をつけて高座に直つた折には、十二三ばかりの兒ちごに見え、それを見物してゐた義滿が、側にゐた藤若を顧みて、「ちごは小股を搔かうと思ふとも、ここはかなふまじ」といつたといふことが書いてある。同じ筆法を以てすれば、及びがたとされた大臣、公卿、武家、また女御、更衣を演ずるときには、その言葉遣

ひも立居振舞も、ほんもののそれよりも、さらにほんものらしい格をもちうるにいたつたといひうるだらう。公卿や武家や女御などが反つて、みづからの風情を舞臺姿から學び、眞似るといふ逆な方向が兆し始めたことにもならう。同じ書のなかで、「萬の物眞似は、心根なるべし。まづその心根心根を思ひ分ちての上の風情、懸りなり」といふ、不逞といつてもよい餘裕を示してゐるところがある。見所の貴人たちが、氣を詰め、息をこらして、満座が「あは止むるよ、止むるよ」といふ氣色にみなぎつたときには、その豫期に反して、「そと止むべし」といひ、また、満座がゆつくりとして、悠々として、これから面白くなると思つてゐるやうな氣色のときは、その氣色を裏切つて、「きと氣を持ちて、きと止むべし」といつてゐる。「當座の人の氣に違へて止むれば面白し。これ人の心を化すなり」とさへ附け加へてゐるのである。「化かすとは、上手の、惡きとは心得ながら、年などよりにて、世子出家以後、内にて舞を化かすこそ、化かすにてあれ。下手の化けの現はるといふ事、ただ目が利かぬなり」といつてこの文を結んでゐるが、六十歳を越えた世阿彌は既にさういふところにあるた。

田舎廻りの興行師から身を起した大和猿樂師、内大臣から乞食の所行といやしめられた能樂師が、そのひたすらな精進努力の末に義滿に認められ、更には後小松天皇の前で能を競ふことになつた。物眞似を基本とした觀阿彌が、下賤の身では及びがたしといった國王、大臣、公卿、武家の起居、また見る事なければよくよく伺ふべしといった女御、更衣の振舞を、「言葉を尋ね、科を求めて、」尋ねに尋ねた末に、その物眞似を完成態に仕上げたのみか、遂には逆に、貴人、美女が能の幽玄をまねるといふところまで達した。世阿彌にいたつては更に一步を越して、「心」の能、「動十分心、動七分身」の能を説いた。「姿を善く見するは心なり」(『花鏡』)の言葉は、それ自體で美しく、またおのづからにして位高く人貌世に變れる公卿たちの即自的な幽玄を一段と高く抜いた高